

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞
口永良部島では昨日（30日）12時過ぎから、山体を震源とする火山性地震が増加しています。
火山活動が高まった状態となっていることから、本日（31日）06時40分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、昨日（30日）12時過ぎから新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しています。昨日10時から本日（31日）07時まで31回（速報値）発生しています。火山活動が高まった状態となっていることから、口永良部島では火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

本日07時までには、規模の大きな火山性地震は観測されておらず、新岳西側山麓付近の火山性地震や火山性微動は観測されていません。また地震増加前後で噴煙の状況にも変化はみられません。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した7月の観測（7月1日～25日）では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり10～30トン（6月：6～50トン）と少ない状態で、検出限界を下回る日も時々みられます。

GNSS連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ (https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php) でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

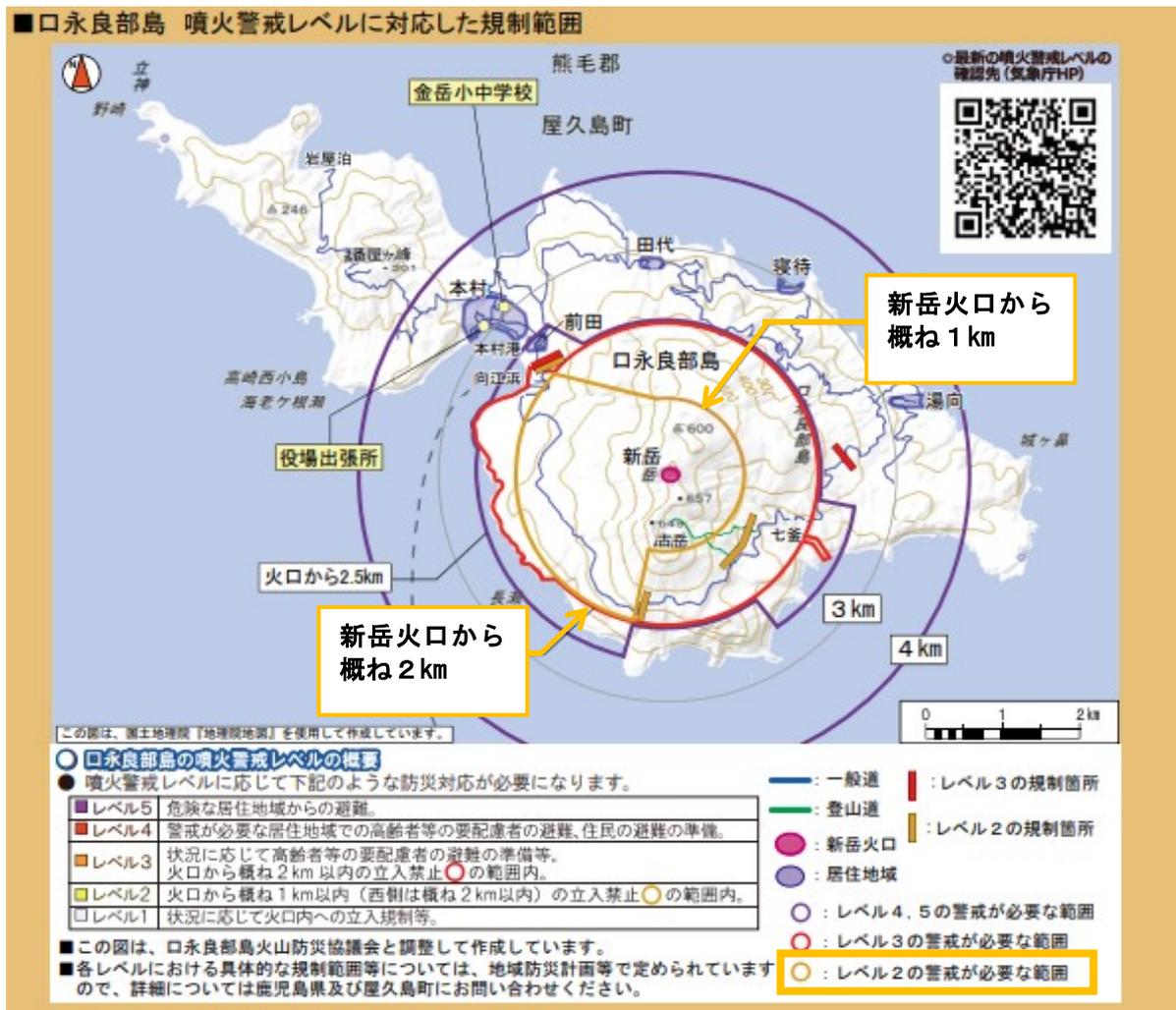


図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口から概ね1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2 km の範囲では、火砕流に警戒してください。風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

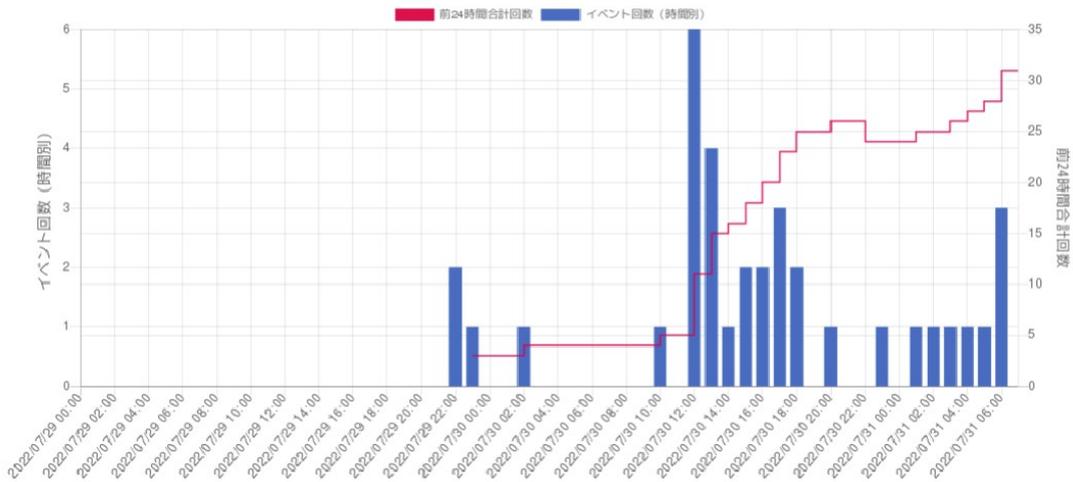


図 2-1 口永良部島 火山性地震の時間別回数と前 24 時間の積算回数
(2022 年 7 月 29 日～31 日 07 時 00 分速報値)

昨日 (30 日) 12 時過ぎから新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しています。

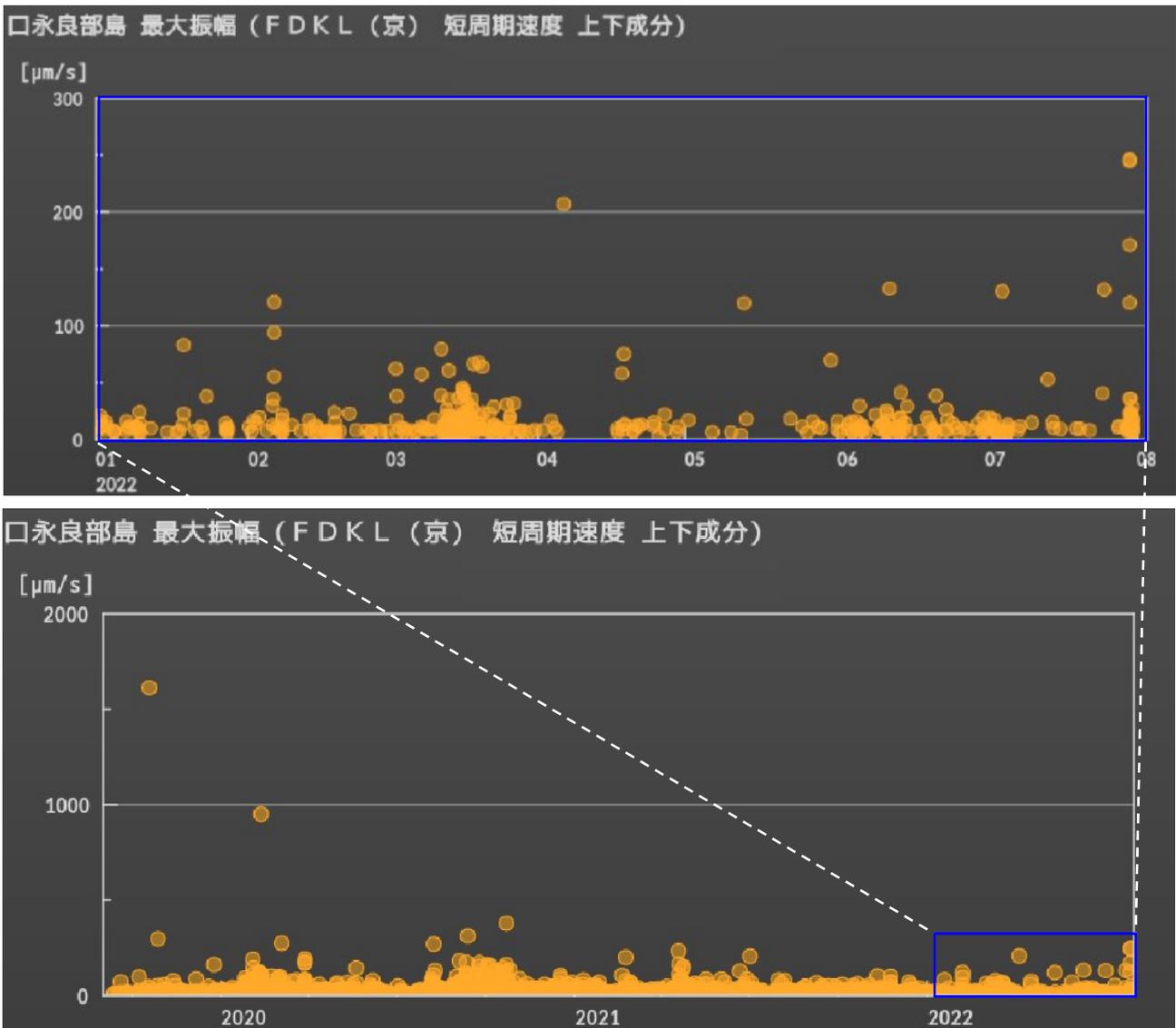


図 2-2 口永良部島 火山性地震の最大振幅 (上段 : 2022 年 1 月 1 日～7 月 31 日 07 時 00 分、下段 : 2019 年 10 月 1 日～2022 年 7 月 31 日 07 時 00 分、FDKL (京) 観測点上下動)

規模の大きな火山性地震は観測されていません。

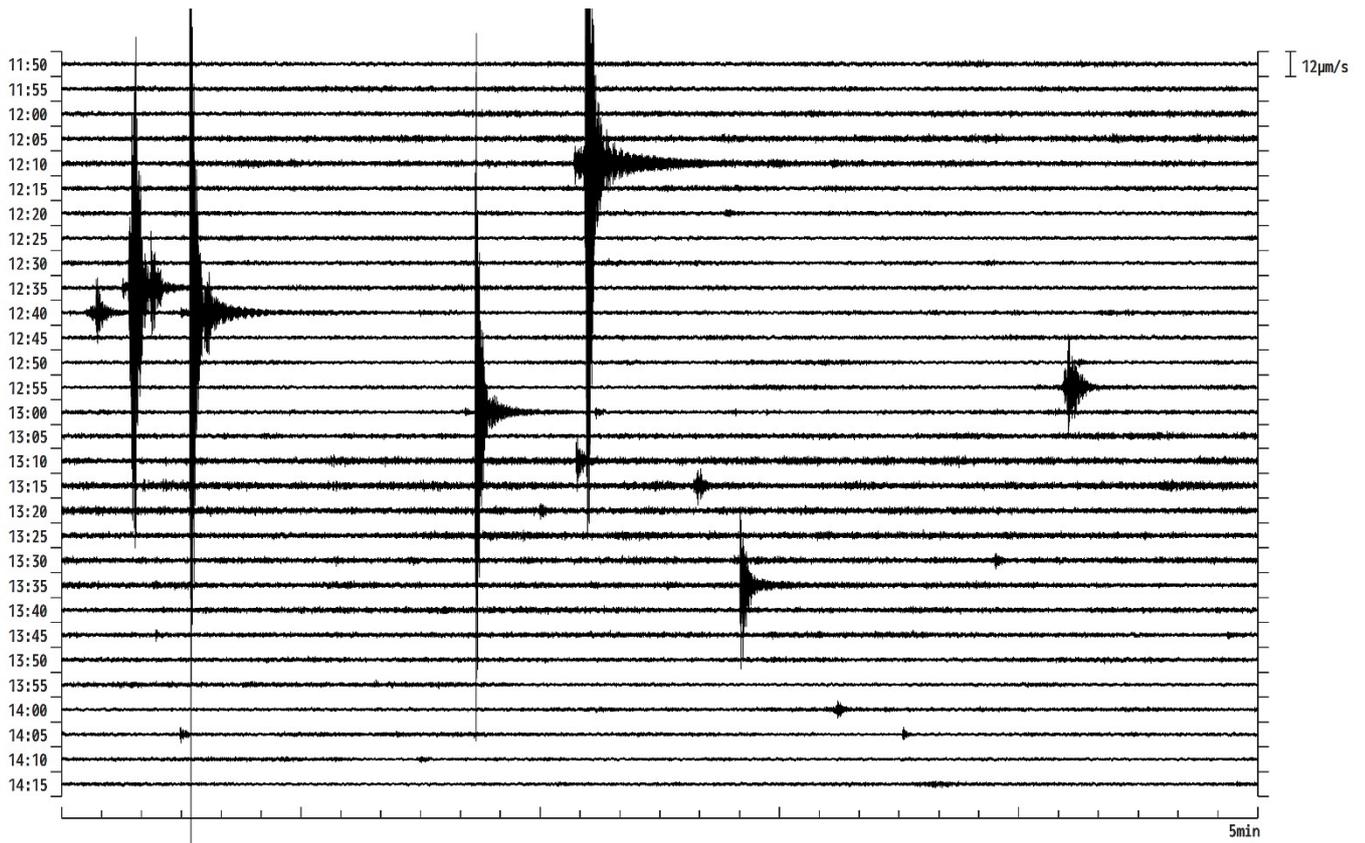


図3 口永良部島 火山性地震の波形例（2022年7月30日11時50分～14時20分、京）FDKL観測点上下動成分）

昨日（30日）12時過ぎから新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しています。

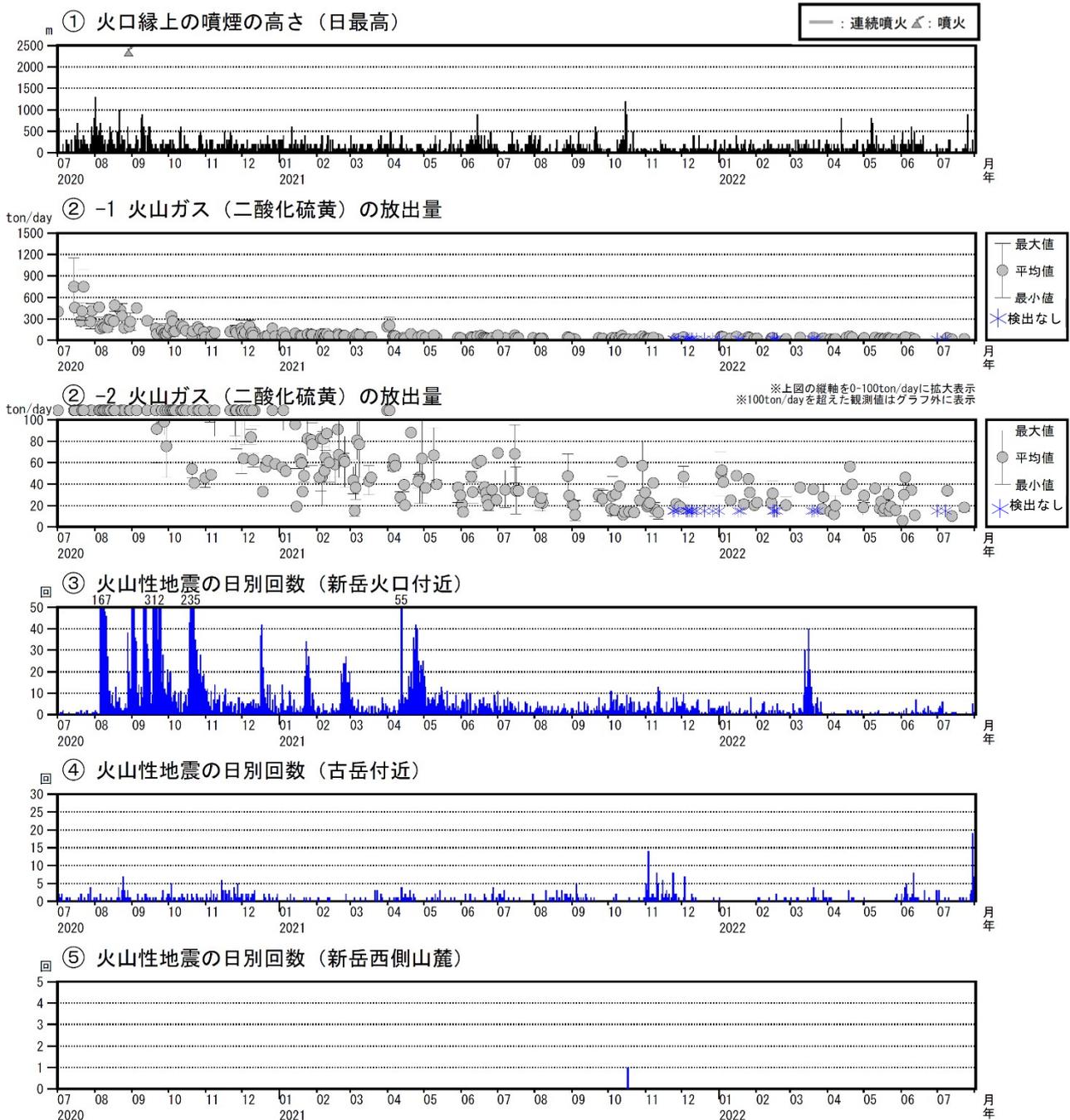


図4 口永良部島 最近の活動経過図（2020年7月1日～2022年7月31日（速報値））
＜7月の概況＞

- ・ 白色の噴煙が最高で新岳の火口縁 900m（6月：600m）まで上がりました。噴煙の状況に特段の変化はありません。
- ・ 東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり 10～30 トン（6月：6～50 トン）と少ない状態で、検出限界を下回る日も時々みられます。
- ・ 昨日（30日）12時過ぎから新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しています。
- ・ 新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されていません。

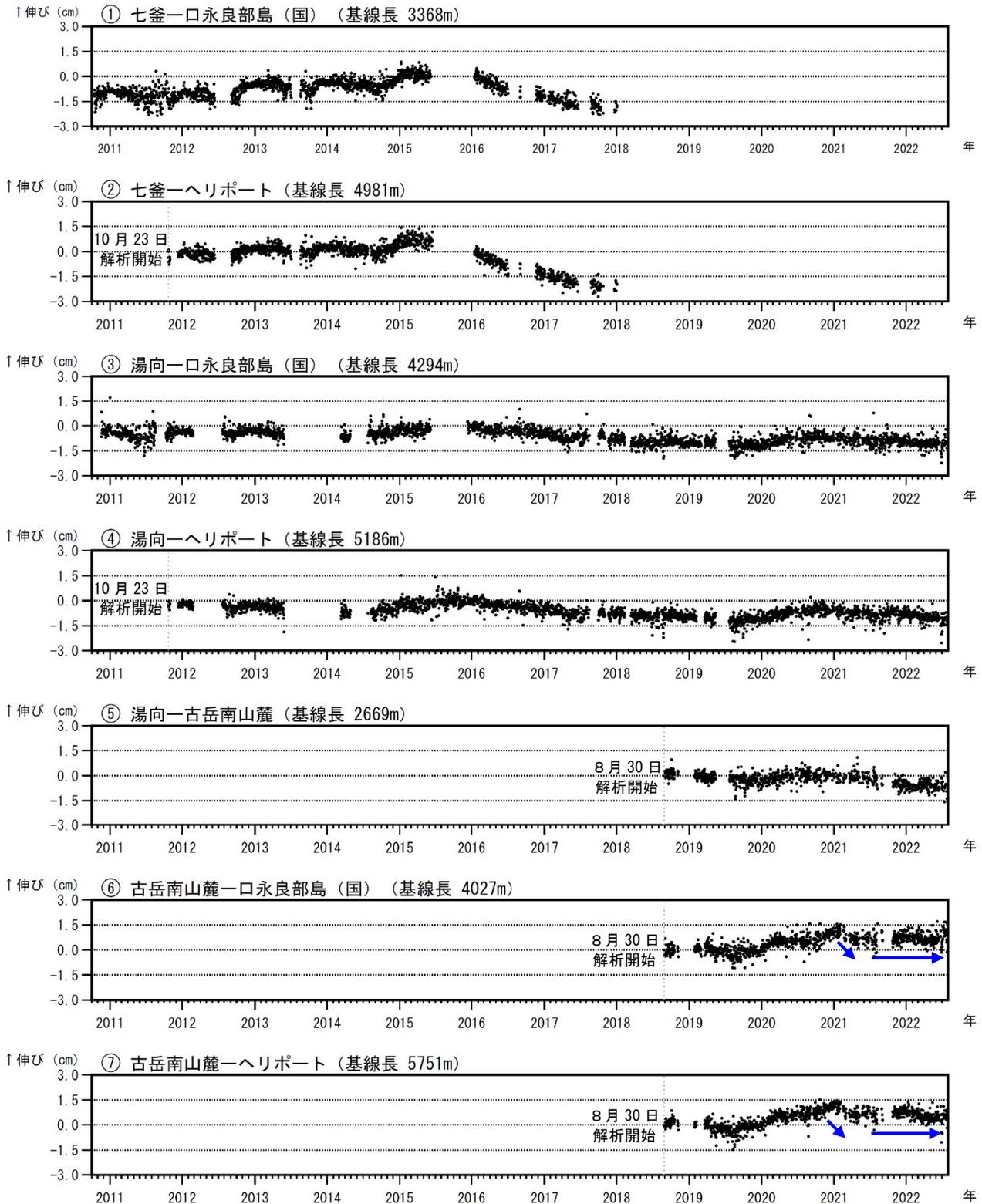


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月~2022年7月29日)

GNSS 連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

これらの基線は図6の①~⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

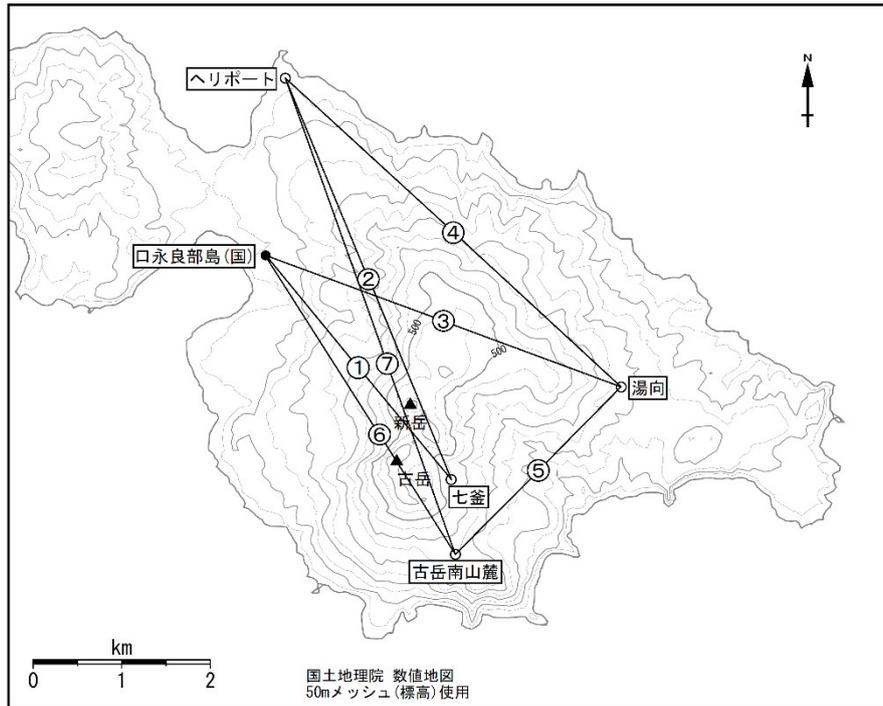


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院

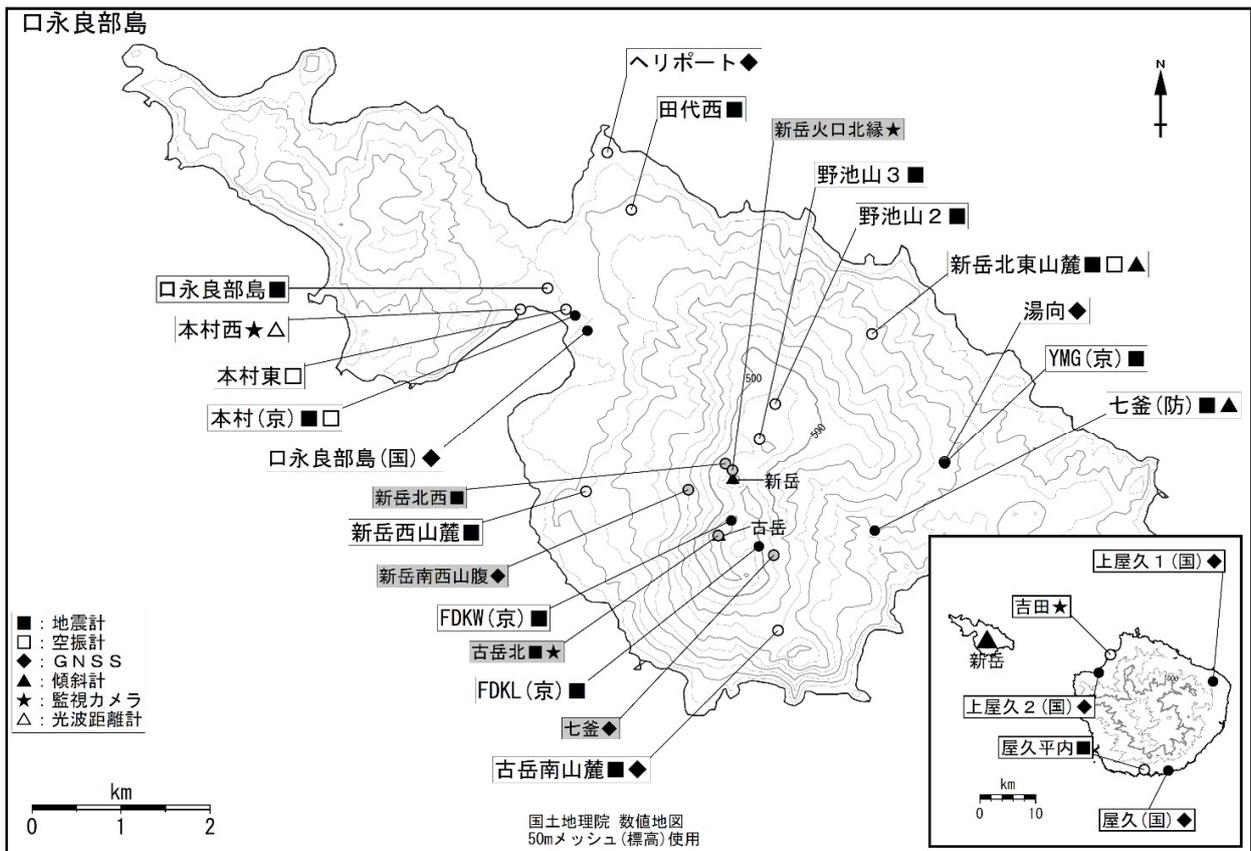


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。